

木の駅上石津（岐阜県）

「お金だけなら、やっくらん」

れた木をみんなで
搬出して木の駅に
出した。「みんな
がちよつとその気
になったら、いく
らでも出せるやん
か」と笑う。

「みんながその気になったら
いくらでも出せる」

「こんなえらいことは2度とやら
んぞ」と言いながら、83歳の三輪
利男さんは軽トラまでの100m
斜面を一輪車で400回近く往復
した。25年生のスキをすべて40cm
に玉切りして、猛暑の8月初旬か
ら11月までに運んだ総量は軽トラ
50台分で20㎡、「木の駅上石津」
にうず高く積まれた。何でそんな
にまでして？ の問いに、「自分
で植えて育てた木を山で腐らせる
のが忍びない」。

岐阜県大垣市上石津町は平成の
大合併で大垣市と一緒にになった。
ただ、合併協議の過程で周辺町村
が離脱し、その結果飛び地となっ



▲坂口智之さん
（現・木の駅上石
津実行委員長）

た。大垣市は濃尾平野の西南部に
広がる水田地帯で、飛び地の上石
津町だけ山がある。ご多分に洩れ
ず過疎高齢化が進み小学校の統合
話を持ち上がり、合併による埋没
の危機感が強まっている。

2010年秋、坂口智之さん
（現・木の駅上石津実行委員長）
たちが恵那市の木の駅を視察した。
続いて鳥取県智頭町での「木の駅
学校」に参加し、上石津町での実
施を決意した。上石津町時地区に
は合併前に掘削した温泉がある。

当初は温泉施設の計画もあったが
合併で棚上げになり、現在は温泉
スタンドでの供給にとどまってい
る。温泉施設を稼働させ、その燃
料は地元には有り余る木質バイオマ
スで自給して、山の恵みを地域に
還元したいと考えた坂口さんたち
は木の駅に着目した。

「木の駅やっても、山に道がなか
ったら出せへんやないか」と、三
輪直義さんは恵那視察の帰り道に
考えた。さっそく森林組合に出か
けて相談した。山を取りまとめて
団地化すれば、間伐ができ林道が
作れると聞いた。すぐに動いた。
自分の住む集落のひと谷の山主20
戸を、1戸1戸回って合意を取り
付けた。すぐに間伐と林道作りが
始まった。そして、切り捨てさ

「つつつ、みんな決めてる

2011年4月、木の駅上石津
実行委員会が始まった。この実
行委員会はジョークが飛び交い、
いつも賑やか。学級委員会のよう
に多数決もよくとる。例えば、お
釣りのない地域通貨はガソリン利
用に集中しがちだ。そのガソリン
を使って、よその大型店舗に買い
物に出かける姿は切ないという。
そこで何枚かに1枚だけ、ガソリ
ンに利用できるように決めること
になった。3枚か4枚に1枚で12
票ずつの同数になり、最後の挙手
で4枚に1枚に決まった。「お
ー」と歓声があがる。他愛ないこ
とのようでも、こうして一つ一つ
愚直に決めていくことが単純に心

地よいのだ。

次に商店の話になった。出荷者たちの「便利やからAコープの店も登録店に」という声が大勢を占め始めたとき、「それもガソリンと一緒にやうやろか」と議論が始まった。「そうや、農協なんか業績が悪かったらいつでも引き上げよるからな」「そやそや」「やっぱり不便でも地元のお店を大事にしよ」……。こんな議論が毎月重ねられた。

そして2011年9月、木の駅



▲目立てから伐木・造材までを山造り塾で



▲丸太を満載の軽トラ行列



▲仲良く出荷する三輪直義さん父子



▲木の駅ボックスに伝票を投函する山元さん



▲未来の担い手に薪割りを教える坂口委員長

上石津が始まった。1年目は2カ月で165m³の集荷、出荷者29戸、登録商店27店。

「面白くなってきた!」

2012年3月、2年目に向けてのスタートで、坂口委員長は躊躇していた。1年目では手当てが立たない。腹案では春は休止で、秋から開始の予定だった。「逆ザヤ補填のメドのつく、秋まで休止したら」と実行委員会で話した。

「なんや、続けんのか」「せっかく面白くなってきたとこやのに」「しゃーないな」「もう道まで出してあるぞ」など声が上がった。「いつもの通り挙手で決をとりますよか?」「逆ザヤ補填なしで3800円/トでも出荷したい人は手を挙げてください」……。

なんと全員が手を挙げた。会場がざわめいた。そして拍手。「お金も欲しいけど、それだけならこんなことやつとらん」「逆ザヤは、水をいっぱい使っている農業用水や大企業にも寄付を頼も」「そや

そや」。もう、このおじさんたちを誰も止められない。「木の駅上石津」。2013年4月、3年目が始まった。これから薪作り・薪販売にシフトしていくことになった。温泉施設開業の悲願達成まで、おじさんたちの鼻息は荒くなるばかりだ。